

## 看護学生の不安の変化

籠 玲子<sup>1</sup>, 佐藤 美紀<sup>1</sup>, 大津 廣子<sup>1</sup>, 川島 良子<sup>2</sup>, 小松万喜子<sup>1</sup>, 曾田 陽子<sup>1</sup>, 西尾亜理砂<sup>1</sup>, 長野きよみ<sup>1</sup>Change of Nursing Student's Anxiety before Practical  
in Fundamental of Nursing for Self-learningReiko Kago<sup>1</sup>, Miki Sato<sup>1</sup>, Hiroko Otsu<sup>1</sup>, Ryoko Kawashima<sup>2</sup>, Makiko Komatsu<sup>1</sup>,  
Yoko Sota<sup>1</sup>, Arisa Nishio, Kiyomi Nagano

【目的】 事前学習の取り組みによる基礎看護学実習前の看護学生の不安の変化を明らかにする。

【方法】 2011年度, 2012年度の2年次の学生174名を対象とした。調査は, 2011年度調査は2011年7, 9月, 2012年度調査は2012年7, 9月に行った。実習前の不安27項目について, 自記式質問紙を用いて調査を行った。

【結果】 有効回答は158件であった。分析の結果, 以下の結果が得られた。1. 実習前の不安では, 「自分の知識」「自分の技術」「患者の急変時の対応」という, 自らの知識・技術についての不安が高かった。2. 実習前の不安について, 事前学習前の7月と実習直前の9月の不安の変化を比較したところ, 27項目中12項目において有意な低下がみられた。3. 実習前の不安について因子分析を行った結果, 【患者関係】【援助の提供】【実習への期待】【指導者との関わり】【患者に適した援助の提供】の5つの因子が抽出された。

キーワード: 看護技術学習, 看護学生, 基礎看護学実習, 実習前の不安

## I. はじめに

臨地実習は, 看護教育におけるカリキュラム時間数の1/3以上を占め, 学内で学んだ知識・技術を臨地で実践することを通して学ぶ貴重な学習の場である。しかし, 臨地実習に臨む学生はさまざまな不安を抱くことが明らかにされている<sup>1)-7)</sup>。不安とは, 一般的には, 気がかりや心配なさま(広辞苑第5版)という意味で用いられるが, 臨地実習における不安も同様な意味である。臨地実習における不安については, 不安を感じるにより過度な緊張が生じ, 実習を効果的に継続することができないという視点からの研究<sup>4)</sup>が行われる一方, 不安は学生の学ぶ動機づけにもなるという視点からの研究<sup>3,7)</sup>も行われている。

実習前にどのような不安を抱くかについては, 実習前に学生が抱く最も大きい不安は, 知識・技術の不足であ

ることが報告<sup>1,2)</sup>されている。また, 普段不安を感じていない学生であっても実習について強く感じる不安は, ケアそのものの成立に対する不安と, 看護記録とその報告および実習記録に関する不安であることが報告<sup>3)</sup>されている。大野木(1996)は, 学生の実習における不安を因子分析し, 「職業適性感」「日常生活の援助技術」「体調」「患者関係」「診療援助技術」の5つの因子があること<sup>4)</sup>を明らかにしている。

実習の不安への対処としては, 実習前の学生にグループディスカッションの場を提供し, 不安が軽減したことが報告されている<sup>8)</sup>。

著者らは, 平成21年度より, 臨地実習が効果的な学習の場となるように, 指導内容・方法を検討するとともに, 実習前のオリエンテーションの工夫や学習環境の改善などを行ってきた。特に, 実習において患者の個性に合わせて援助ができるように, 紙上事例を作成し, 実習室における事前学習を促している。これらの取り組みは,

<sup>1</sup>愛知県立大学看護学部(基礎看護学), <sup>2</sup>新潟看護医療専門学校

学生の不安が軽減することを目指して行ってきた<sup>9)</sup>。

そこで今回は、本学の学生の実習前の不安が事前学習の取り組みの前後でどのように変化したかを報告する。

## II. 研究目的

事前学習の取り組みの前後における、基礎看護学実習前の不安の変化を明らかにする。

## III. 方法

### 1. 対象

2011年、2012年に基礎看護学実習を履修し、調査票を研究に使用することに同意した2年次の学生174名を対象とした。

### 2. 調査方法

基礎看護学実習は、夏季休業後の10月上旬にあり、実習オリエンテーションを夏季休業前の7月下旬と実習前の9月下旬に行っている。学生は夏季休業中に実習に向けての学習を行う。事前学習については、詳細は先行文献<sup>9)</sup>に示しているが、技術学習を想定した紙上事例を示し、実習室にて技術学習を取り組める環境を整備した。事前学習の前後における不安の変化を調査するため、7月と9月のオリエンテーションにおいて調査を行った。7月に、2回の調査の自記式質問紙を一括に配布し、配布した時点で1回目の調査を行い、9月に2回目の調査に回答することを依頼した。回答した質問紙は、基礎看護学実習終了後に双方とも実習記録とともに回収した。同意書は、実習記録の提出の際に記録とは別に封緘して提出してもらい、成績確定度に開封して同意の有無を確認し、同意が得られた学生の調査票のみを研究の対象とした。

### 3. 調査内容

学生が看護技術を提供することに関する不安を中心に、先行研究を参考に項目を作成した。また、不安の質問紙は、STAIの状態不安の表現を参考<sup>10)</sup>にし作成した。質問紙作成時の枠組みとしては、実習前に感じる学生の不安について、「患者への看護援助の提供(9項目)」、「患者との関わり(5項目)」、「指導者(看護師・教員)との関わり(5項目)」、「自らの知識・技術に関すること(5項目)」の4つの枠組みの質問項目と、「看護過程につい

て」、「グループの協力について」、「健康面について」の3項目を加え、合計27項目について、「5:非常に思う」から「1:まったくそう思わない」の5段階評定で尋ねた。作成した質問紙は、研究者間で項目の適切性について確認した。

### 4. 分析方法

1) 著者らが作成した実習前の不安の27項目について、選択肢の5~1を5点~1点に得点化し、7月時点と9月時点の得点を対応のあるサンプルのt検定を用いて比較した。

2) 27項目について項目分析(G-P分析, I-T分析)を行い項目の選定をした後、因子分析を行った。下位尺度のCronbach's  $\alpha$ を求めた。

以上のデータ分析は、IBM SPSS Statistics 20を用いた。

### 5. 倫理的手続き

愛知県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。学生に対して、7月下旬の実習オリエンテーション時に、研究協力依頼を文書と口頭で行い、書面で同意を得た。説明内容は、①研究参加の同意は自由意志であること、②同意書は実習終了後に所定の封筒に封緘して提出し、これを成績確定後に開封するため、研究参加の有無が成績に影響しないこと、③匿名性を保持することについて説明し、それらを遵守した。

## IV. 結果

対象の174名の全員から回答が得られた(回収率100%)。そのうち、回答に欠損のあった16名分を除き、158名分の回答を有効回答(有効回答率90.8%)として分析した。

### 1. 2時点における実習前の不安

7月時点と9月時点の不安の各項目の平均値および標準偏差、2時点の平均値の差の検定結果について、表1に示す。なお、本文の質問項目末尾の(†)は逆転項目を示す。

7月時点の実習に対する不安について、実習に対する不安の平均値が3.0未満であった項目は、「26. グループメンバーと協力できるか不安である」「27. 実習期間中、体調をさない自信がある(†)」であり、2項目とも9月時点も3.0未満であった。

実習前の不安の27項目のうち、「1. 患者に不快感を

表1 実習に対する不安の各時点での平均値と標準偏差および2時点における平均値の差  
n=158

	実習に対する不安 <sup>注1)</sup>	7月時点		9月時点		t値 <sup>注2)</sup>
		mean	SD	mean	SD	
1	患者に不快感を与えないか心配である	4.1	0.8	4.0	0.8	1.76*
2	自分の援助で患者の病気が悪くならないか緊張している	3.8	0.9	3.7	0.9	1.30
3	患者のしてほしいことに気づくか心配である	3.9	0.8	3.9	0.8	-0.21
†4	患者の急変時に正しく対応できる自信がある	4.3	0.9	4.1	1.0	2.54*
†5	患者に援助をどのような方法で行うかわかると思う	3.5	0.6	3.3	0.5	4.28*
6	患者の援助に時間がかかりすぎないか不安である	4.0	0.8	3.9	0.9	0.74
7	てきぱきした動作がとれるか緊張している	4.0	0.8	4.0	0.9	1.00
8	計画が変更になったとき対応できるか心配である	3.6	0.9	3.6	0.9	0.98
†9	報告が適切にできる自信がある	3.8	0.7	3.6	0.8	1.82
†10	患者に受け入れてもらえるだろうとリラックスしている	4.1	0.7	4.0	0.7	0.86
11	患者に嫌われないかと緊張している	3.4	1.0	3.3	1.0	1.04
12	自分の言葉で患者を悩ませないか心配である	3.5	1.0	3.4	1.0	0.81
†13	患者と話をすることにウキウキしている	3.9	0.7	3.3	0.9	6.94*
†14	患者に聞きたいことが聞ける自信がある	3.9	0.7	3.7	0.7	2.32*
15	看護師の仕事の邪魔にならないか緊張している	3.7	1.0	3.6	1.0	1.94
16	看護師とうまく話ができるか心配である	3.4	1.0	3.2	1.0	1.94
†17	看護師がどのような人か楽しみである	3.2	0.9	3.0	0.9	2.36*
†18	教員や看護師に質問できるだろうと安心している	3.2	0.9	3.3	0.9	-1.38
19	教員や看護師にやさしく指導してもらえるか心配している	3.1	1.0	3.0	0.9	1.94
20	自分の知識が十分でないかもしれないと心配している	4.3	0.7	4.2	0.7	2.77*
†21	自分の技術に自信がある	4.4	0.5	4.1	0.6	4.49*
22	自分は何もできないかもしれないと緊張している	3.6	1.0	3.4	1.0	3.00*
23	失敗しないか不安である	4.1	0.8	4.0	0.8	2.16*
24	習った知識や技術が応用できるか心配である	4.0	0.8	3.8	0.8	2.69*
25	看護過程が展開できるか心配である	4.1	0.8	4.0	0.9	1.43
26	グループメンバーと協力できるか不安である	2.4	1.0	2.2	1.0	3.05*
†27	実習期間中、体調を崩さない自信がある	2.8	1.2	2.6	1.1	1.88

5段階評定 5：非常にそう思う～1：まったくそう思わない で回答を得た。数値が高いほど不安が強いことを表す。

注1) 設問の†は逆転項目である。表の得点は逆転した得点

注2) 対応あるサンプルのt検定 \*p&lt;0.05

与えないか心配である」「4. 患者の急変時に正しく対応できる自信がある (†)」「5. 患者に援助をどのような方法で行うかわかると思う (†)」「13. 患者と話をすることにウキウキしている (†)」「14. 患者に聞きたいことを聞ける自信がある (†)」「17. 看護師がどのような人か楽しみである (†)」「20. 自分の知識が十分でないかもしれないと心配している」「21. 自分の技術に自信がある (†)」「22. 自分は何もできないかもしれないと緊張している」「23. 失敗しないか不安である」「24. 習った知識や技術が応用できるか心配である」「26. グループメンバーと協力できるか不安である」の12項目に

おいて、平均値が有意に低下 ( $p<.05$ ) していた。

## 2. 実習前の不安の因子構造

27項目について、項目分析(G-P分析, I-T分析)を行った結果、「17. 看護師がどのような人か楽しみである (†)」はG-P分析とI-T分析ともに統計的に不適当な項目と判断したため除外し、26項目について因子分析を行った。

因子数を固定せず因子分析を行った結果、5つの因子を抽出した。全ての因子において因子負荷量が0.35未満であった「4. 患者の急変時に正しく対応できる自信が

表2 実習前不安の因子分析 (最尤法: 直接オブリミン回転)

質問項目 (全項目 $\alpha=0.89$ )	n=158				
	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
【第1因子 患者関係】 ( $\alpha=0.79$ )					
11. 患者に嫌われないかと緊張している	0.93	0.13	0.01	-0.07	-0.02
12. 自分の言葉で患者を悩ませないか心配である	0.47	0.20	-0.20	-0.07	0.26
【第2因子 援助の提供】 ( $\alpha=0.88$ )					
7. てきぱきした動作がとれるか緊張している	-0.01	0.81	0.00	0.06	0.02
23. 失敗しないか不安である	0.04	0.75	0.02	-0.06	0.09
24. 習った知識や技術を応用できるか心配である	0.06	0.70	-0.01	-0.04	0.03
8. 計画が変更になったとき対応できるか心配である	0.03	0.64	0.03	-0.08	-0.05
22. 自分は何もできないかもしれないと緊張している	0.25	0.54	0.00	-0.21	0.00
6. 患者の援助に時間がかかりすぎないか不安である	-0.05	0.51	0.06	-0.07	0.23
20. 自分の知識が十分でないかもしれないと心配している	0.09	0.47	0.02	-0.04	0.08
【第3因子 実習への期待】 ( $\alpha=0.74$ )					
13. 患者と話をすることにウキウキしている	0.14	-0.23	0.61	-0.05	-0.04
5. 患者に援助をどのような方法で行うかわかると思う	-0.08	0.11	0.60	-0.03	-0.12
18. 教員や看護師に質問できるだろうと安心している	-0.09	0.04	0.57	-0.22	-0.19
14. 患者に聞きたいことが聞ける自信がある	-0.05	0.07	0.55	-0.01	0.12
9. 報告が適切にできる自信がある	-0.08	0.01	0.54	0.09	0.20
10. 患者に受け入れてもらえるだろうとリラックスしている	0.29	0.07	0.46	0.13	0.09
21. 自分の技術に自信がある	-0.04	0.21	0.44	-0.01	0.02
【第4因子 指導者との関わり】 ( $\alpha=0.79$ )					
16. 看護師とうまく話ができるか心配である	-0.03	0.00	0.04	-0.86	0.13
15. 看護師の仕事の邪魔にならないか緊張している	0.06	0.04	-0.03	-0.77	0.16
19. 教員や看護師にやさしく指導してもらえるか心配している	0.05	0.27	0.06	-0.39	-0.13
【第5因子 患者に適した援助の提供】 ( $\alpha=0.77$ )					
1. 患者に不快感を与えないか心配である	-0.02	0.07	0.02	-0.06	0.73
3. 患者のしてほしいことに気づくか心配である	0.01	0.08	0.07	-0.06	0.69
2. 自分の援助で患者の病気が悪くならないか緊張している	0.23	0.06	-0.02	-0.19	0.54
因子負荷量平方和	3.53	4.10	1.79	1.19	0.81
累積寄与率 (%)	16.04	34.67	42.83	48.25	51.92

KMO値: .869

表3 各因子得点の平均値および標準偏差

	7月時点		9月時点		t値 <sup>注1)</sup>
	mean	SD	mean	SD	
【第1因子 患者関係】	3.4	0.9	3.4	0.9	1.1
【第2因子 援助の提供】	4.0	0.6	3.8	0.7	3.0*
【第3因子 実習への期待】	3.7	0.5	3.6	0.4	4.1*
【第4因子 指導者との関わり】	3.4	0.8	3.3	0.8	2.8*
【第5因子 患者に適した援助の提供】	3.9	0.7	3.9	0.7	1.3

注1) 対応のあるサンプルのt検定 \* $<0.05$ 

ある(†)「25. 看護過程が展開できるか心配である」  
「26. グループメンバーと協力できるか不安である」  
「27. 実習期間中、体調を崩さない自信がある(†)」の4項目  
を削除した。その結果、5因子22項目(累積寄与率  
51.9%)が抽出された。因子分析の結果について、表2  
に示す。

因子分析において抽出された5因子の平均値および標準偏差、2時点の平均値の差の検定結果について、表3

に示す。

【患者関係】は7月時点で $3.4 \pm 0.9$ 、9月時点では  
 $3.4 \pm 0.9$ であった。【援助の提供】は、7月時点で  
 $4.0 \pm 0.6$ 、9月時点で $3.8 \pm 0.7$ 、【実習への期待】は7月  
時点で $3.7 \pm 0.5$ 、9月時点で $3.6 \pm 0.4$ 、【指導者との関わり】  
は7月時点で $3.4 \pm 0.8$ 、9月時点で $3.3 \pm 0.8$ 、【患者  
に適した援助の提供】は、7月時点で $3.9 \pm 0.7$ 、9月時  
点で $3.9 \pm 0.7$ であった。【援助の提供】、【実習への期待】、

【指導者との関わり】は、7月時点から9月時点の不安得点の平均値が有意に低下 ( $p < .05$ ) していた。

## V. 考 察

### 1. 学生の実習前の不安について

実習に対する不安のうち、調査した2年度の学生は、7月時点で「26. グループメンバーと協力」の不安が他の項目と比べて低く、7月時点に比べ9月時点で有意に低下していた。不安の得点が低いことは、2年次の実習オリエンテーションを受けるまでにグループメンバーとすでにより関係があったこと、不安の低下は、夏季休業中にグループメンバーで技術練習を行う日程を決め練習を行ったことが影響していると考えられる。「27. 実習期間中、体調を崩すか」の不安は、他の不安に比べ強くないことは、先行研究<sup>9)</sup>と同様の結果であった。

「4. 患者の急変時への対応」「20. 自分の知識が十分でないかもしれないと心配している」、「21. 自分の技術に自信がある(+)」は他の項目に比べ得点が高かった。この結果は、実習前に学生が抱く不安で最も大きいのは、知識・技術の不足である<sup>11)2)</sup>という先行研究の結果と同様の傾向であった。一方、これらの不安は、7月時点より9月時点で不安が有意に低下しており、このことは学生が事前学習に取り組んだことや教員の支援の影響であると考えられる。

「1. 患者に不快感を与えないか」「5. 患者に援助を行う方法がわかるか」「22. 自分は何もできないかもしれない」「23. 失敗しないか」「24. 習った知識や技術が応用できるか」については、事前学習をして技術練習を行うことで不安が低下したと考える。

「13. 患者と話をする」「14. 患者に聞きたいことを聞ける」は、患者に関わる不安の逆転項目として設けたが、不安は有意に低下しており、学生は患者との関わりを実習が近づくことでより楽しみにしているとも考えられる。また、実習が近づくことで患者のイメージが高まっているとも考えられる。

「17. 看護師がどのような人か」という不安が低下していることは、事前学習の効果よりも、教員から学生への指導者に関する情報提供がなされたことが不安を軽減しているのかもしれない。

### 2. 実習前の不安の因子構造と特性

実習前の不安について、先行文献を参考に項目を選定したが、因子分析の結果は、項目を選定した際の枠組みとは異なる因子構造であった。今回、不安についての逆転項目を設けたが、逆転項目は1つの因子として抽出された。今回は【実習への期待】と名付けたが、不安を逆転項目で尋ねることが不安であることを明らかにすることになるか、今後検討する必要がある。

【患者関係】の2項目は、自らの振る舞いに対する患者の反応についての不安であると考えられる。臨地実習の不安について、自分には看護を実践する能力があるかと不安に思うことは、同時に、良き看護者へと成長していく可能性があることを意味していることともいわれており<sup>3)</sup>、このような不安は学生の「成長につながる不安」であるといえる。その一方、過度に失敗を恐れたり、他人の目を気にしたりする不安、自己へのこだわりから来る不安は、そのままでは好ましいものではないともいわれており<sup>3)</sup>、このような不安は学生の学習を「制約する不安」であるともいえる。【患者関係】は、実習で患者と接してよい関係を築くことができるかを案じているため、このような不安を実習前に過度に抱くことは「制約する不安」となると考えられる。今回の調査でも、【患者関係】については、7月時点と9月時点で有意差はみられない。教員は、学生がこのような不安をもつ場合、過度な緊張とならないよう話を聞き、実習に向けての学習を妨げないように配慮する必要がある。

【援助の提供】は、患者に援助を行うことへの不安であり、先の【患者関係】と区別された。これらの項目は、実習前に何ができるかを明確に方向性をもつことにより、学習につながる「成長につながる不安」となる可能性が高いと考えられる。本調査において、7月時点より9月時点において平均値が有意に低下しているため、事前学習の取り組みの効果により不安が低下したと考えられる。

【指導者との関わり】は、調査までに学生が経験した実習における指導者との関わりが不安の強さに影響すると考えられるが、学生が実習前に対処できないため、「制約する不安」になる可能性もある。今回、教員は指導者と打合せを行った後に、9月のオリエンテーションで指導者の紹介を行うことにより、学生が指導者をイメージすることができ、7月時点より9月時点の不安が低くなっていると考えられ、事前学習を行うことの効果とは考えにくい。

【患者に適した援助の提供】は、【援助の提供】が患者

の個別性をふまえたよりよい援助ができるかという不安である。患者の不快感や患者の望むことは、実習で患者に接して初めて知ることができるため、教員は学生が不安に感じていることについて、実習病棟の患者の特性を伝えることや、援助を行うことで起こりうる患者の反応を伝えることにより、学生が実習の不安を軽減できると考える。また、患者に不快感を与えることがあっても、患者とよい関係を築くことにより関係は修復できることを伝える必要があると考える。

## VI. 結 論

基礎看護学実習前の事前学習の取り組みによる学生の変化について、以下のことが明らかになった。

1. 実習前の不安では、「自分の知識」「自分の技術」「患者の急変時の対応」という、自らの知識・技術についての不安が高かった。
2. 実習前の不安について、7月と9月の不安の変化を比較したところ、27項目中12項目において有意な低下がみられた。
3. 実習前の不安について因子分析を行った結果、【患者関係】【援助の提供】【実習への期待】【指導者との関わり】【患者に適した援助の提供】の5つの因子が抽出された。

## 謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆さまに深く感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 山下タケ子：基礎看護学実習に伴う不安に関する一

考察. 看護教育, 23(9), 552-567, 1982.

- 2) 阿部京子他：基礎看護学実習に伴う不安内容の分析. 第21回看護教育, 248-251, 1990.
- 3) 藤田美津子：初めての臨床実習を前にした看護学生の不安—学習への動機づけとして—. 看護展望, 21(3), 98-108, 1996.
- 4) 大野木裕明他：看護実習不安の心理的構造と変化. 看護教育, 37(1), 55-60, 1996.
- 5) 山下満子他：臨地実習における学生の不安に関する研究（第2報）—基礎看護学実習1と基礎看護学実習2の実習前における不安内容の変化—. 京都市立看護短期大学紀要, 26, 11-19, 2001.
- 6) 近藤邦他：看護学生が実習前に感じる不安に関する研究—基礎看護学実習と領域別実習との比較—. 三育学院短期大学紀要, 34, 11-25, 2006.
- 7) 佐藤公子：基礎看護実習 I-2. II における学生の変化—不安が臨床実習の達成感や自信に及ぼす影響—. 第39回看護教育, 100-102, 2008.
- 8) 和泉春美他：臨地実習における学生の不安に関する研究（第1報）—初めての臨地実習を前にした学生の不安に対するディスカッションの効果—. 京都市立看護短期大学紀要, 26, 1-9, 2001.
- 9) 佐藤美紀, 大津廣子, 籠玲子, 川島良子, 小松万喜子, 曾田陽子, 西尾亜理砂：基礎看護学実習前の技術学習方法の検討. 愛知県立大学看護学部紀要, 18: 83-90, 2012.
- 10) 菅原健介：不安. 堀洋道（監修）松井豊（編）心理測定尺度集Ⅲ—心の健康をはかる（適応・臨床）—, pp. 183-187, サイエンス社, 2001.